

週日の説教

金 大烈 神父 2008年9月11日(木)

《譲ること、相手の立場に立つこと》

今日は、第一朗読も福音も十分に深く話しが出来るような内容です。

まず、第一朗読(コリント 8.1-7, 11-13)ですが、最初にこのように書いてあります。「知識は人を高ぶらせるが、愛は作り上げる。」

人によって多少差があるかもしれませんが、人間の心には、自分が知識に満たされていることを他の人々から認められたいという気持ちがあります。ですから、読んだこと、聞いたこと、目にしたことを自分の知識として、自分が人の前に立つために使いたいのが、人間の一つの本能です。誰かが自分の知っていることを口にするると「ああ、そうだね」とは言わずに、すぐに、「それならば私も知っている」と言ってしまう。結局、知識を求める人は自分より低い知識を持っている人を探します。それは、知識を使って自分を高いものにしたい、という狭い心を持つことを意味します。

しかし、愛は作りあげます。それは、神様の創造事業に神様と一緒に与ることです。神様は、破壊するものではありません。いつもよいものを作り出します。そして、その作り出す大きな出来事や働きに、私たちが一緒に参加することになります。

結局、大切なのは謙虚になることです。ですから、信仰の勉強をする時は、まず私たちが行動で示すことが何より必要です。今の時代は勉強というものは、より良い仕事を探すための手段だと思いい努力をしています。しかし、それによって出来た成功なら、真の成功だとは言えないと思います。勉強というのは、自己実現のためのものです。しかし、今の教育の雰囲気は、失敗しないために、人々の見本となるために、よい学校へ入らなければならないと教えています。よい高校へ入って、よい大学へ入って、弁護士とか医者のような、もっとお金を儲け、様々な権力を振るえる人になるように導いています。それらに何の意味がありますか？人間はみんな、いつかは死ぬのです。そしてまた、そういう道を歩む人々、いわゆるいろいろな面で物質的な豊かさを享受しているが、幸せな顔をしているのを目にしません。

話が変わりますが、第一朗読の最後の言葉は、コリントの人々が、偶像(いろいろな偽の神)に捧げた供え物を食べてよいのかどうか、という言い争いをしているのに対して、使徒パウロが言っているものです。彼の話簡単に説明すると、「食べ物には何の罪もないので食べてもよい。しかし、それを食べてしまうことで誰かが心を痛めるのならばやめたほうがよいだろう。」ということです。これも私たちがよく考えないといけないことです。柔軟性という言葉がありますね。そして、似ている言葉に融通性という言葉もあります。それは、「正しいと思っはいるが、それにこだわると、他の人々が疲れてしまう。だから、次の機会があることを考えて、譲る」ことをいいます。

しかし、固い知識から出発してしまうと、こういう柔軟性を絶対に持てません。どんなによいものでも、人を困らせたり、痛めたりするものであれば、とりあえず、譲ってもよいのではないかと考えるべきです。譲っても悪いものでなければ譲ってあげる必要があることを意識したほうがよいでしょう。

みなさまが教会の中でぶつかる原因の一つは、自分の頭の中にある少しの知識のために激しい感情を出してしまうことです。そういうことがあることを認めましょう。

福音(ルカ.6.27-38)もいろいろな話書いてありますが、全体的にいうと、赦すことについてです。赦すためには何が必要でしょうか？

赦すことはとても難しいことです。聖書では、敵という言葉を使っていますが、私たちはあまり敵という人々に出会いません。結局私たちの心を痛めるのは、『憎い』人です。そんなに私たちに悪いこ

とをしたわけではないけれどただ憎い人、気があわない人です。そういう人によって私たちは傷を受けたり与えてしまったりします。そして、私たちはいつも赦さなければならないと言われます。その赦しの出発点は、憎い人の立場に立ってみることです。その人の立場になってみて、あの人はなぜこういうことをしたのか、何回も何回もよく考えてみることです。しかし、私たちの悪いところは相手の立場に立つことをできるだけ避けようとしていることです。まず赦す相手がいれば、その人の立場で考えてみましょう。なぜそのような言い方や振る舞いをしなければならなかったのか。そしてその人の痛みや弱ささえも一緒に理解できれば相手を赦す心になるのではないかと思います。

私たちは、いつも自分の立場に立って裁こうとする癖があります。しかし相手の立場で自分を裁こうとしてみてください。そうすれば全然知らなかった自分の弱さを見ることができると思います。見ることができたら、それを何とかすることが大切です。

ありがとうございました。